



アルバムとは人の歴史そのもの。

退色せずに安定した色を残せるDreamLabo 5000と堅牢な製本技術を活かし、ほかにはない付加価値のあるアルバムを届けたい。

株式会社イシクラは、1936年に設立された卒業アルバムを中心に、学校・企業のパンフレットや広報宣伝物、ノベリティグッズ、Web等、さまざまなクリエイティブを提供する会社です。卒業アルバムの分野では年間約3,000校、40万冊を手がけ、日本有数のアルバム制作会社として知られています。

社内工場にオフセット印刷機や銀塩機等を備えるなか、2016年3月、DreamLabo 5000を新たに導入。その経緯はどのようなものだったのでしょうか。そしてどのように活用されていくのでしょうか。今後の可能性とともに株式会社イシクラ 取締役 工場長 泉谷竹信さん、生産部 開発情報課 課長 森下健夫さんにお話を伺いました。

— DreamLaboについてのお話をいただく前に、いまだのような事業をどのような機材で行なわれているのかについて教えてください。

森下健夫 ● 弊社の業務は卒業アルバムの製作がメインです。卒業アルバムは納品が卒業式と決まっているものなので、秋から春にかけて「アルバムシーズン」という繁忙期があるんですね。ひと昔前でしたら10月ころから3月までが忙しく、4月から9月頃は余力があるという状況でした。しかし、それでは事業として成長が見込まれませんが、卒業アルバム以外にも製造技術を活かした商材の開発にも取り組むようになりました。そのひとつが2007年から始めたプライダルアルバムです。



DreamLaboを使ったフォトブック、アルバムの一例

— 制作のDTP化が進み、撮影もフィルムからデジタルに変わったことで「アルバムシーズン」にも変化はあったのでしょうか。

森下 ● 生産設備が整い、生産能力が高まったことで、遅くなくても対応できるようになりました。結果、制作スタートはどんどん遅くなっていますね。印刷も12月中旬くらいから始まり、1月からは24時間体制で印刷を行ないます。一方、卒業式の写真までを含めて、卒業後に納品するケースも増えており、その場合の納品時期は5月～7月になります。年間3,000校のうち、卒業時に納品するものが2,000校、卒業後に納品するものが1,000校くらいの割合ですね。

— 卒業アルバムの印刷・製本と一般的な印刷物ではどのような点が異なるのでしょうか。

森下 ● もらった人が一生見るものですから、傷ひとつ許されません。とにかく検品を厳重にしています。顔に傷なんてあったら、全部刷り直します。色についてもアルバム独自の色が求められますから、弊社独自の、いわゆる「イシクラ色」というものを提供しています。

— 卒業アルバムの印刷はオフセット印刷なのでしょうか。

森下 ● 9割がオフセット印刷で、50部以下の場合、オンデマンドで対応するケースが多いのですが、なかには少数でもオンデマンドに比べて色の評価が高い、オフセット印刷を希望されるお客

さまもいます。すべてお客さま次第ですね。2017年4月からはオンデマンド印刷機をリプレイスし、オンデマンドでもオフセット印刷と同等の、きれいな印刷ができるような体制にしています。

— そうしたなかでDreamLaboを導入された経緯について伺えますか。

泉谷竹信 ● きっかけはそれまで使っていた銀塩機に限界を感じていたからです。銀塩機は10年前、ウェディング事業を始めるにあたり導入したもので、お客さまの要望を満たすには当時のインクジェットではクオリティが及ばなかったため、印画紙にせざるを得ませんでした。銀塩機ですら当然、印画紙にしかプリントができず、両面プリントもできません。専ら貼り合わせのプライダル商材専用機として活用していましたね。ただ、将来的にはこうした商材はインクジェット印刷に変わっていくだろうと予測していたので、DreamLaboが出てきたとき、「これはいい」と導入を検討し始めました。

— 導入検討時、DreamLaboの品質についてはどのように評価されていたのでしょうか。

泉谷 ● 発表当初のDreamLaboは、光を当てると虹のように反射したり、いかにもインクジェットらしい出力でした。徐々に改良されて、シャドウ部にも濃淡がしっかり出るようになり、テストや検証を重ねた結果、導入を決定しました。

— 運用面でDreamLaboに期待していた点がありますか。

泉谷 ● ひとつはスピード、もうひとつは管理コストの低さです。DreamLaboは銀塩機に比べると、ペーパーの装填や薬品の管理など、ハンドリング面で非常に効率的だと感じました。銀塩時代に実際に経験したことで、夏場の長期休みの間に現像液が劣化しており、プリントした時点では問題がなかったものが、1か月後、2か月後になって劣化したということがありました。銀塩プリントには、何かあってもその場で結果が判定できない不安定なところがあったのです。DreamLaboのようなインクジェット印刷にはそう



DreamLabo 5000 CLIENT Interview

1,178mmにもなる両観音折を取り入れたフォトブックは、同社ならではの製本ノウハウが活かされている

した心配がありませんし、アルバムでは重要な指標となる耐光・退色についても問題がないというのは大きなポイントでした。

— 現在、DreamLaboをどのように活用されているのでしょうか。

森下 ● プライダルアルバムが中心ですが、いまはそれをさまざまな小ロットアルバムなどにも広げているところです。一番力を入れているのはダブルレイフラット（観音折）タイプのフォトブックで、A4横なら両観音折を広げると1,178mmというパノラマ感が特徴です。鉄道写真や風景写真ははじめ、レイアウト次第でおもしろいものができるのではないかと考えています。より手軽にできる、無線綴じの小冊子タイプも検討しておりまして、DreamLaboの品質を生かせるものを、ある程度安価に提供できないかと検討を進めています。

— DreamLaboを今後、学校アルバムの出力にも活用される予定ですか。

泉谷 ● もちろん、その予定で検証を進めています。しかし、まだ商品として展開するにはまだ解決しなくてはならない課題が残っているというのが現状です。学校アルバムはとにかく丈夫で壊れず、傷がつきにくいということが求められます。ページを引っ張っても抜けない、そのくらいの強度がないと営業は自信を持ってお客さまにご提案できません。また、弊社の製本工程は100%機械化されていますから、そのラインに乗せるためにもDreamLaboのプリントをいかに傷つげずに機械加工し、絶対に壊れない強度に仕上げるか。そうした検証も行なっています。学校アルバムのサイズを考えると、出力サイズがあと40mm広くなれば、完全にDreamLaboで完結できるのですが、現在は他機種と組み合わせで1冊を作らなければならないという点も解決すべき課題のひとつですね。

学校アルバムの場合、ページが多いものは、オフセット印刷したものを糸かがり・上製本に仕上げますが、少数ではコストが見合いません。こうした少数でも多ページのアルバムを作りたいというユーザーに対して、DreamLaboを活用していきたいと考えています。

森下 ● とにかく、学校アルバムに活かせるか。そのための検証と開発を積極的に進めています。結果、学校アルバムの分野でも、オフセット印刷よりも色域が広くきれいなDreamLaboを広めたいと考えています。

— DreamLaboを使って作ろうとされている学校アルバムとはどのようなものなのでしょうか。

泉谷 ● 高い印刷技術と堅牢な製本技術、機械化による効率化によって、他社には真似できない、価値を感じていただけるアルバムを作りたいですね。私たちのユーザーは学校や生徒たちになりますが、そこに対して、DreamLaboが描く表現力、高級感という付加価値のあるアルバムを提供していきたいと考えています。学校アルバムというのは、最終的には子どもたちや先生に喜んでもらえるのが一番。それこそが最大の付加価値なんです。ただ、写真がレイアウトされたアルバムがあればいいということなら、ネットで注文できるフォトアルバムでいいわけですし、どんな機械で印刷されていても思い出を記録した製品としては成り立ちます。弊社としては、そこにひと手間ふた手間かけたものを、ほかではできないきれいな仕上がりで作り上げることで、アルバムを受け取る方々に感動を提供したい。そういう意味ではDreamLaboは、いま、最適な機械なのです。

— 御社にとって「アルバム」とはどのようなものなのでしょうか。

泉谷 ● 災害時に持ち出したものとして、上位に入るのが写真やアルバムですよ。一人で写っ

ている写真も必要ですが、仲間とそのときの生活の風景が写っているものはかけがえのないものなのです。学校アルバムも日本の文化として永く根付いており、どこにあるかわからないという人はいても、捨てる人もまずいません。アルバムとはいわば人の歴史そのものなんです。だからこそ、私たちはネットプリントのように人の顔が見えないかたちでアルバムを作るのではなく、担当営業をつけて、とにかく大事に作っていく。そこに価値があると思っていますし、それがアルバムを作るということに対する責任だと考えています。

DreamLaboを使ったアルバムにはいろいろな構想があります。そのためにも、さまざまな技術を学び、アイデアを膨らませながら課題を乗り越え、一生大事にいただける製品を提供していきたいですね。



泉谷 竹信
Takenobu Izumiya
株式会社イシクラ
取締役
工場長



森下 健夫
Takeo Morishita
株式会社イシクラ
生産部 開発情報課
課長

株式会社イシクラ/埼玉県さいたま市岩槻区。1936年、東京都荒川区に石倉コロタイプ印刷所として創業。卒業アルバムの印刷から製本まで一貫した生産に早くから取り組み、全国有数のアルバム印刷・製本会社となる。カラーアルバム化、DTP化等にも柔軟に対応。現在は関東を中心に、各地の卒業アルバムを手がけるほか、学校・企業のパンフレットや広報宣伝物、ノベリティグッズ、Web等、さまざまなクリエイティブを提供。